

ミステリ読書案内

2023. 12. 26 発行元

第539号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

阿津川辰海「午後のチャイムが鳴るまでは」

9月に実業之日本社から阿津川辰海の『午後のチャイムが鳴るまでは』が出た。今回は高校を舞台にした「日常の謎」を取り上げたミステリ。生徒たちの学校生活の中でいろいろな楽しみが伝わってくる作品と言える。

「学園もの」ミステリ

『Web ジョイ・ノベルス』などに連載した作品に書下ろしを加えた短編集。でも、登場人物には繋がりがあがり、最終話で一気に判明してくる事実もあるので「連作」として興味深く読むことができる。舞台は、「九十九ヶ丘高校」。しかも、9月9日という日のお昼時間に校内のあちこちで起きる出来事を取り上げた形になっている。

「校舎図」を始めとしていくつかの図が登場してくるのも「本格もの」らしさを感じる。基本は「日常の謎」系の展開である。

第一話は「RUN!ラーメンRUN!」

この題名を見た時、「はやみねかおる」の『都会のトム&ソーヤ』を思い出したが、それについては「あとがき」に解説が書いてある。学校の昼休みに抜け駆けをしてラーメン屋に食べに行く話。いかに見つからないように、気付かれないように…がポイント。

第二話の『いつになったら入稿完了?』は文芸部の原稿締め切りの時間が迫ってくる話。探していた人物の姿が校舎の角ですう〜と消える人間消失の謎。

第一話と第二話では登場人物が完全に入れ替わっているように見えるのだが…。実は関連があつて…と後で気付くことになる。

学校は子どもたちにとって楽しいところではなけれは…

第三話以降の内容については省略するが、私が思うに「学校は子どもたちにとって楽しい場所ではなけれは…」ということ。実際に教員を長年やってきた私が言うのは変な話かもしれないけれども、年々子どもたちは追い詰められ、苦しさが先立つ場所が「学校」になってはいないだろうか?ということ。

「学力」ひとつを取っても、全国規模のテストが実施され、結果によってあちこちから圧力がかかる。「授業の充実」が叫ばれ、すべての子どもたちが学習活動に組み込まれていく手法になっていく。

阿津川辰海・作品リスト

1. 名探偵は嘘をつかない
2. 星詠師の記憶
3. 紅蓮館の殺人
4. 透明人間は密室に潜む
5. 蒼海館の殺人
6. 入れ子細工の夜
7. 録音された誘拐
8. 午後のチャイムが鳴るまでは

一時間目から六時間目まで積極的に動くように求められ続け、緊張感を強いられる授業が並んだなら、子どもたちはパンクしてしまうだろう。子どもたちにとっては「リラックスして、楽しい授業」の方がずっとよいのではないだろうか。

小学校での英語授業がかなり前から始まったが、「英語好き」を生み出すと同時に「英語嫌い」も生み出しているような気がしてならない。それよりは日本語の「物語」を学んだ方がずっと子どもたちのためになるような…。とかく日本の学校教育は目先の成績に振り回され過ぎていていると思う。

人生全体を見ての教育を

本書の中には教科の授業場面はひとつも出てこない。「それでいいのだ」と思う。生徒一人一人が生き生きと活躍してくれるのならそれが何よりだと思ふからだ。

松岡圭祐「新人作家・杉浦李奈の推論X」

10月に角川文庫から出た本。シリーズ十作目。副題は『怪談一夜草子の謎』。これは岡本綺堂の掌編の題名で、本作品の中に全文が紹介されている。文久二年、江戸の本郷千駄木坂下町の団子坂にある屋敷に浪人者の親子が暮らし始めた。「崇りがある」と曰く付きの屋敷で…。ある夜、近くの者を集めて宴会を開いたのだが…、と続く。結末があるようなないような怪談話で…。

前作で賞を取り有名作家の仲間入りをした杉浦李奈が純文学のベテラン作家・丹賀源太郎の宴会に招かれる事になった。行ってみると、そこには源太郎の息子で差別用語でんこ盛りでベストセラーになった丹賀笠都がいた。関係者を交えて会はスタートするのだが、そのうち扉を叩くような音が聞こえて…。様子を見に行ったら二人の姿が消えて…。皆で裏の寺まで探しに行くと…。

井上ねこ「赤ずきんの殺人」

10月に宝島社文庫から出た本。副題は『刑事・黒宮薫の捜査ファイル』。グリム童話の見立て殺人が連続して起こる。最初の事件では、裂かれた腹部に石が詰め込まれていた『赤ずきん』の狼。特殊詐欺グループに加わっていた男が被害者だった。「警察小説」風の仕立てなのだが、地道な捜査の積み重ねがメインなのでなくて…。発想の割には今一つ盛り上がらなかった。